



**Data**

監督・脚本：クォン・オグァン  
 エグゼクティブ・プロデューサー：  
 イ・チャンドン  
 出演：イ・グァンス/イ・チョニ/  
 パク・ボヨン/キム・ヒウオ  
 ン/チャン・グァン/イ・ビ  
 ヨンジュン/チョン・インギ  
 /ミョン・ゲナム

## 👁️👁️ みどころ

世の中にはさまざまな奇病、難病があるが、フィッシュマン（魚人間）は病気ではなく、臨床試験の結果、副作用で人為的に作り出されたもの。世の中の注目を浴びたフィッシュマンは悪魔か英雄か？それとも食糧？

若手の脚本家が書いた面白い原案を、イ・チャンドン監督がエグゼクティブ・プロデューサーとして映画化！そんな韓国映画の活力はさすがだが、朴槿恵（パク・クネ）大統領の弾劾事件で揺れ動く今の韓国は若者世代の不満でいっぱい。そんな不満が、見事に本作に！

バカバカしさや詰め込み過ぎという難点もあるが、それ以上の問題提起性がすごい。もし、自分が魚男になったら・・・？そんな想定は絶対にしたくないが、ラストシーンを見ると、魚男もあながち悪くはないかも・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■若手の面白い企画を巨匠がプロデュース！■□■

韓国では朴槿恵（パク・クネ）大統領が「弾劾決議」によって遂に職務停止に！ここまで彼女を追い込んだのは、「崔順実（チェ・スンシル）問題」が浮上する中で、連日の大規模デモを挙行した若者たちの力が大きいですが、今韓国の若者たちは何に不満を持っているの？本作のパンフレットには、本作の脚本を書き監督した1983年生まれのカン・オグァン監督の「現代の韓国社会は、まるでコメディそのものです。」から始まり、「都市部にはますます悪が蔓延し、マスコミは批評的な立場に立つという本来の機能を完全に失っています。」と「この映画は寓話です。」の2つに分かれた「あいさつ文」がある。その中に「若者代表」としてのカン・オグァン監督が、現在の韓国社会に対して持つ「怒り」

が凝縮されている。

他方、イ・チャンドン監督と言えば『オアシス』（02年）（『シネマルーム7』177頁参照）、『シークレット・サンシャイン（密陽）』（07年）（『シネマルーム19』66頁参照）等に代表される作品で、今や巨匠。韓国映画芸術学校に在籍中のクォン・オグァンが、大学とCJ E&Mの共同プロジェクトで優勝すれば、尊敬するイ・チャンドン監督と一緒に脚本を推進できるというコンペティションがあることを知り、頭に思い描いていたアイデアを企画として出したところ、それを採用したのがイ・チャンドン監督だ。その結果、イ・チャンドン監督がエグゼクティブ・プロデューサーとなって完成したのがクォン・オグァン監督の第1回長編監督作品となる本作だが、クォン・オグァン監督は2013年の第66回カンヌ国際映画祭で短編部門のパルムドールを受賞しているそうだから、脚本づくりの才能は相当なもの……。

## ■□■グエムルvsカエル男vs魚人間！■□■

「韓国のスピルバーグ」と言われる当時36歳のポン・ジュノ監督の独創性が発揮され大ヒットしたのが『グエムル 漢江の怪物』（06年）（『シネマルーム11』220頁参照）だった。あのグエムルの一見愛嬌があるようでかなり怖かったクリーチャー・デザインと比べて、本作でイ・グァンスが演じる魚人間のクリーチャー・デザインは？

他方、私が12月4日に観た邦画『ミュージアム』（16年）で雨の日を選んで猟奇殺人を繰り返していたのがカエル男だったが、それは本来の姿ではなく単なる仮面だった。同作では犯人がなぜ雨の日を選んでカエル男の仮面を被らなければならなかったのかがポイントだったが、本作に見る魚人間はもっと悲惨で、カネのため臨床試験に参加したところ、原因不明の副作用で魚人間に変身してしまったらしい。しかして、良くも悪くも本作の評判を左右するのはタイトルにもなっているフィッシュマンのクリーチャー・デザインだが、グエムルやカエル男と比べてそのインパクト度は？

## ■□■韓国の若者は三者三様に過酷！■□■

本作導入部では、韓国社会の現実の中で3人の若者たちが三者三様に過酷な運命に立ち向かう姿が描かれる。すなわち、①30万ウォンのために製薬会社の新薬治験に応募したことで、原因不明の副作用のために魚人間になってしまったパク・グ（イ・グァンス）、②社会の不条理をただす記者になりたいという信念を持って某テレビ局の面接を受けたところ、「うまく取材できたら採用してやる」と言われ、「魚人間の取材に行け！」と命じられた新人記者のサンウォン（イ・チョニ）、③魚人間になる前のパクらと共に映画のエキストラに参加していたところ、ひょんなことで一夜限りのセックスをしてしまったことが縁で、行くところがなくなった魚人間から頼られてしまった若い女性ジン（パク・ボヨン）の3人だ。

パクは「僕の夢は、平凡な人間になること・・・」と語っていたが、今の韓国ではそれすらできないの？サンウォンの魚人間への取材はストライキ中のテレビ局で人手が不足する中、ドン・シク部長（チョン・インギ）の独断による「テスト採用」の結果だが、韓国ではこんなハッキリした労基法違反のやり方がまかり通っているの？はずみでやってしまった一夜限りのセックスのお相手がいきなり家に転がり込んできたことにとまどったジンは、あっさりパクをカンミ製薬会社に売り渡し（？）、自分で自分のことを「私は人を利用するようなワガママな女なの」と宣言していたから、かなりイヤな女・・・？

今を生きる日本の20代の若者はおしなべて優しくかつ上品だが、この3人に代表される今を生きる韓国の20代の若者は、ホントに過酷・・・。

## ■□■弁護士、部長そしてピョン博士の世代は？■□■

ドン部長がサンウォンにジンの取材を命じたのは、フィッシュマンをめぐる話題が大きくなるにつれて、その実像に迫るためには「フィッシュマンの恋人」と名乗るジンの取材が不可欠と判断したため。しかし、そこで「テレビ局の名前を絶対に言えないように」と釘を刺したのは一体なぜ？それは、取材に成功しそのネタが使えることになればテレビ局はもちろん自分の名前も大きく売り出すが、もし取材に失敗すればそのネタをヤミからヤミに葬り去るためだ。このように、今の韓国社会の実務を取り仕切っている中年世代はズルい奴ばっかり・・・。

体内でタンパク質を無限に供給し、食糧難を解決する実験を行っていたにもかかわらず、謎の副作用によってフィッシュマンを生み出してしまったカンミ製薬会社の臨床試験の責任者はピョン博士（イ・ピョンジュン）だが、その謝罪会見における説明はしどろもどろで全く要領を得ない。ラストに向けてワンシーンだけ登場するカンミ製薬会社の社長（ミョン・ゲナム）と交わす会話を聞いていると、ピョン博士はかなり深くまでカンミ製薬会社の内部に入り込んでいたようだから、ひょっとしてフィッシュマンを元通りに戻す術も知っていたのでは？そんな疑いすら湧いてくるから、この中年男も曲者だ。

さらに本作中盤以降、フィッシュマンの代理人としてカンミ製薬会社と闘うキム弁護士（キム・ヒウォン）も当初はゼニカネ抜きで正義のために闘う人権派弁護士と思われたが、ラストに向けては某所でピョン博士らと話し合うシーンが登場するから、アレレこの中年弁護士もかなりの曲者・・・？盧武鉉（ノ・ムヒョン）大統領の若き日の弁護士時代（の一端）を描いた『弁護士』（13年）は、直球一筋の人権派弁護士のすごい生きざまを見せつけてくれたが、本作に見る中年の人権派弁護士のキムには要注意・・・？

このように、今の韓国の実務を動かしているドン部長、ピョン博士、キム弁護士の3人をそれぞれこのような曲者風のキャラにしたのは、自分は若者世代を代表していると考えているクォン・オグエン監督のこだわりのため・・・？

## ■□■親世代も大問題！魚人間騒動の結末は？■□■

本作中盤はキム弁護士を代理人としてカンミ製薬会社と闘う①キム弁護士、②フィッシュマン、③新聞記者サンウォン、④ジンの姿が中心だが、そこに1人だけ親世代として加わるのが、フィッシュマンの父の父親たるパク・サンチョル（チャン・グァン）だ。息子にはしっかり勉強して公務員になってもらいたかった父親にしてみれば、目の前を見る息子の姿は最悪。こんな息子に誰がした！そんな怒りは当然カンミ製薬会社に向けられたが、そこで父親の口から出てくるのは「いくら賠償金を払うのか？」というカネのことばかり。これにはフィッシュマンと共に行動しているものの、フィッシュマンの恋人ですらないジンはビックリだが、中盤ではこの2人の対決（言い合い）が面白い。キム弁護士とサンウォンはそのなだめ役として対カンミ製薬会社の共同戦線を成立させていたが、裁判に勝ち順調な流れの時は内部の結束は固かったものの、カンミ製薬会社の逆襲が始まり、弁護士を先頭にした闘いが逆境になってくと・・・？

本作後半では①今はサンウォンのアパートに隠れ住んでいるフィッシュマンが起こす首つり自殺事件（フィッシュマンはエラ呼吸をしていたため首を吊っても幸いなことに死亡せず、未遂）、②フィッシュマンとの結婚など到底考えられなかったジンとフィッシュマンとのお別れ、等のシークエンスを経て、結局フィッシュマンはカンミ製薬会社に戻り、再び人体実験を受けることになったからヤレヤレ。大山鳴動して鼠一匹動かずだ。フィッシュマン騒動は、結局フィッシュマンの父親がカネをもらうだけで終わってしまったの・・・？

## ■□■ホントの結末は？魚男の真の願いは？■□■

本作はアイデア勝負の映画で、チラシの写真を見ただけでもその異様さにビックリ！そこに踊る「うたい文句」も、「フリーターは魚になり、魚は国民的スターに。腐敗し切った大人たちに闘いを挑んだ彼らが目にした光景とは——。」というショッキングなものだ。そんなアイデア（原案）を思いつき脚本を書いたクォン・オグァン監督は、オフィシャルサイトの中で「段々と変異を遂げて魚になっていく人間と、むしろその魚男以上に突然変異体のような周囲の人間たちを描きたいと思いました。」と語っている。クォン・オグァン監督のそんなスタンスからすると、前述した結末までの展開ではモノ足りないのは当然。しかして、本作では1度終わったように思えたストーリーがラスト数分間で再び始動し「ホントの結末」を迎えるので、それに注目！どんでん返しの結末に向けてストーリーが再始動するきっかけは、「ピョン博士はフィッシュマンを人間に戻せる方法を知っていたのに、それを隠していた」と主張してキム弁護士が再び裁判を起こしたこと。これによってピョン博士は有罪判決を受け、刑務所に収監されることに・・・。

他方、部長から「フィッシュマンの取材を中止せよ」と命じられたサンウォンは今はテレビ局の社員になっていたが、日々の仕事にどこか不満そうで、面接を受けた当初の信念

は吹き飛ばしてしまっている様子。そんなサンウォンの下を久しぶりに訪れてきたジンがサンウォンに手渡した1枚の写真をよくよく見てみると、その端っこには何とあのフィッシュマンの姿が。なるほど、フィッシュマンはまだ死んでいなかったわけだ。すると、フィッシュマンは今どこに・・・？新しい裁判の中で明らかになったように、ピョン博士がホントにフィッシュマンを元に戻す方法を知っていたとすれば、今頃フィッシュマンは人間の姿になり、どこかで幸せな生活を営んでいるの・・・？ひょっとして、ジンと結婚・・・？いやいや、それはなさそうだ。そんな疑問が広がる中、最後にスクリーン上に見えてきたフィッシュマンの姿とは・・・？

かつて、フランキー堺が主演し、2008年には中居正広がりメイクした『私は貝になりたい』という名作があった（『シネマルーム21』208頁参照）が、そのタイトルの意味は「私は何もしゃべりたくない」というということだった。しかして、カンミ製薬会社に戻っていったフィッシュマンがピョン博士に伝えた希望は何と、「魚になること」だったらしい。さて、そんな彼の希望は叶えられたのだろうか・・・？

2016（平成28）年12月27日記